

東京桑野会会報

●1998年4月1日発行●発行・編集人 澤田 悌●発行所 東京桑野会事務局 〒160 東京都新宿区新宿1-3-8 YKB新宿御苑804



No.20



東京桑野会会長 澤田悌

ご挨拶

- ①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること
- ②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること
- ③何んらかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

平成10年を迎えまして皆様如何お過ごしでしょうか。東京桑野会会報第20号をお届けいたします。

昨年を顧みますと、なげかわしい事件が続発し、日本という国も民族も何となく衰退しつつあるのではないかと心配になるような1年でした。新たな希望をもって新年を迎えたのでありますが、バブル崩壊の傷は今なお深刻で、経済も金融もそして政治もおしぼらくは混迷を続けそうです。

しかしこの現状に耐えこれを乗り越えて行くことが国民的課題です。早く安定と繁栄を取りもどし、2年後には輝かしい21世紀を迎えたいものです。その時はわが安

積の母校の歴史も実に3世紀に亘ることとなります。母校も桑野会も更に充実発展を続け、同窓の皆様も一層ご健康でありますよう祈念いたします。

さて別掲ご案内の通り東京桑野会の平成10年度総会を来る4月28日例年通り目白の椿山荘で開催いたします。東京地方在住の安積同窓の皆様にとって年1回の楽しい集いであります。どうか沢山の方々をご出席下さいまして盛大な会を開き、あの安積、桑野を偲び、思い出を語り杯をあげて大いに楽しもうではありませんか。ご来会をお待ちしております。

東京桑野会定期総会開催のお知らせ

東京桑野会のメインイベントである、定期総会と懇親会を開催いたします。多数の同窓会員の皆様に参加されますようにご案内申し上げます。

- 期 日 1998年（平成10年）4月28日（火）
- 時 間 午後5時——受付開始
午後6時——総会
午後6時30分——懇親会
- 議 題 1. 会務報告の件
2. 予算決算の件
3. 役員改選の件
4. その他
- 場 所 目白 椿山荘
東京都文京区関口2-10-8（TEL 03-3943-1101）
JR目白駅、地下鉄有楽町線江戸川橋駅下車
- 会 費 懇親会費 8,000円（学生・年度会費含む 3,000円）
1998年度東京桑野会会費 2,000円

東京桑野会は会員皆様の年度会費によって運営されていますので、総会当日ご出席出来ない会員の皆様には、同封の振込用紙で年度会費 2,000円のお振込みご協力をお願い申し上げます。

◇準備の都合もございますので、出欠の返事は同封の葉書で4月18日迄にご返送下さいますようお願い申し上げます。

◇また、連絡もれもあるかと思われますので、先輩、同期、後輩もお誘い合わせのうえ、多数の出席をお願いいたします。

◇昨年度は、1997年4月16日に開催され、180名近い参加者があり盛況でした。

母校便り

（平成9年12月17日発行安積高校新聞第151号および本田裕教頭提供資料による）

★海外派遣研修

第4回安積高校海外派遣事業が、中国を派遣先として10月16日から24日まで9日間にわたって行われた。二年生10名とともに滝本先生と竹内先生が同行された。これまでの欧米圏から離れ、はじめてアジア圏への派遣となった。武漢、西安、上海を訪問、ホームステイや現地高校生との交流など様々な研修を重ね、充実した研修を送った。来年度はオセアニア圏（ニュージーランド）？

★インターハイ

5月から6月にかけてインターハイの県大会、県南大会が行われた。前年度に比べて安高生の活躍は少なかったようであるが、水泳部、剣道部の活躍がめざましく県大会では、共に団体優勝を飾り、東北大会・全国大会に駒を進めた。

★文化部

文化部では将棋部が県大会で準優勝し、合唱部・吹奏楽部もそれぞれ賞をとった。

★長野オリンピック

長野オリンピック聖火リレーに本校からも渡邊君と菅原君が参加した。

★紫旗祭

8月30日から31日にかけて第113回紫旗祭が盛大に行われ、恒例の仮装行列の他、数学者としても大道芸人としても有名なピーター・フランクル氏による講演会も持たれた。

★論説から

論説で「トップシェアーへの道」と題して、マイクロソフトとアップル、任天堂とソニー・コンピューター・エ

人が、季節が、集います。

味

お食事

伝統の味に季節の彩りそえて

- 料亭・錦水
- 松阪牛和風料理・蔵れ家
- レストラン・カメラア

宴

ご宴会

華やかな集いに17の大小宴会場

- 2,500名様までのパーティ、国際会議、ファッションショーなどのお集まりに。
- 最新機能の音響装置。

寿

ご婚礼

佳き日に永遠の幸せを誓う

- 800名様までの日本料理、フランス料理、着席ご披露宴。
- 庭園での記念撮影も随時お撮りいただけます。
- チャペルでのご挙式も承ります。



CHINZAN-SO
椿山荘
03-3943-1101

音楽から探る精神の普遍性



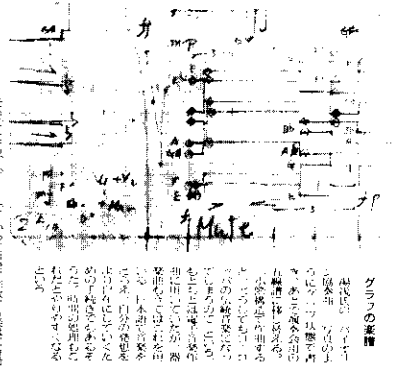
ゆあさ・じょうじ 作田家。カリフォルニア大学音楽院。1929年福岡県高田市生まれ。入会が以て作曲の道に進む。中絶して独学で作曲の道に進む。51年、武満徹、滝口修造らと「実験」を結成。戦後の音楽界を代表する作曲家として知られる。『交響組曲』・『春の組曲』・『ゲストラ』の代表的な作品。『ヴァイオリン協奏曲』・『オペラ』・『武満徹』・『新編への眼』など。『新編』・『交響組曲』・『春の組曲』・『ゲストラ』など受賞多数。著書に『音楽のロマン』がある。

知の冒険

音楽は誰が誰に人の心をゆきよめる日本の現代音楽も、伝統と革新の狭間で、二つの道を歩む。独自の音楽を創出する。音楽は誰が誰に人の心をゆきよめる日本の現代音楽も、伝統と革新の狭間で、二つの道を歩む。独自の音楽を創出する。音楽は誰が誰に人の心をゆきよめる日本の現代音楽も、伝統と革新の狭間で、二つの道を歩む。独自の音楽を創出する。

宇宙見つめる感性が必要

「宇宙見つめる感性が必要」という言葉が、最近よく聞かれる。これは、現代社会の複雑化やグローバル化が進む中で、人々が抱える精神的な課題を克服するために必要とされている。感性を磨くことで、未知の世界を切り開くことができる。



『日本経済新聞』'97年5月25日付 コラムより

エンターテインメントの企業戦略に関して論じられていた。一方、同面で「どうなる？安高前コンビニ」なる見出しで、安高生のオアシス“コンビニ”の閉店を惜しむ記事があった。好対照でおもしろかった。

年9月17日付けで前橋地平成9検検事正に就任されました。

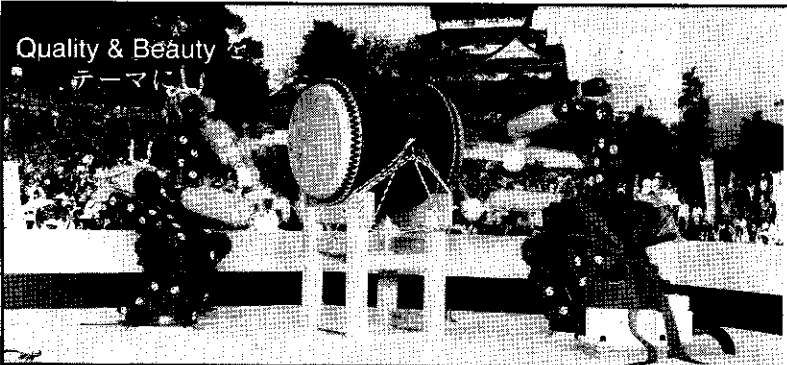
☆作田譲治氏（76期、前通産省官房審議官貿易局担当）は、平成9年9月11日付の人事で通産省基礎産業局長に就任されました。氏は通産政策局調査室長として83年の「通商白書」を書かれました。

■NEWS ●元安積高校教諭牧田治久先生、漢詩訳集『江河起来』発刊！

福島県立安積高等学校に於いて、約30年、国語・漢文の教鞭をとるかたわら、漢詩（古中国詩）を優雅な大和ことばに訳してこられた。この度、その一部（118篇）を一冊の本にまとめ世に出すことになったのが『江河起来』。広大な中国大陸で生まれた古来の中国詩独特の、雄大さと緻密さ、自然と人間、愛と哀しみ等を先生が日本語の美

会員動向

☆湯浅譲二氏（58期、作曲家、日本大学芸術学部芸術研究所教授）は、NHK大河ドラマ「徳川慶喜」の音楽を担当されていますが、平成9年、N響主催の「第45回尾高賞」を受賞されました。受賞作は「ヴァイオリン協奏曲（1996）ーイン・メモリー・オブ・武満徹」で、これが3回目の尾高賞受賞です。また、「ヴァイオリン協奏曲」などの新作が長年の創作活動の成果として高く評価されて「第28回サントリー音楽賞」（サントリー音楽財団主催）も受賞。さらなる活躍が期待されます。☆宗像紀夫氏（73期、前最高検検事）は、



当社ロボット工場では、
祇園太鼓ロボットがお客様をお迎えいたします。



株式会社 安川電機
取締役社長 橋本伸一（換算63期）
本社 北九州市八幡西区黒崎城石2-1 〒806-0004
TEL093-645-8800

柳沼彌重先生追悼特集

柳沼彌重先生を偲び特集をくみました。会員各位から寄せられた追悼文とともに、先生が生前書かれた「あさかのうた I 恩師菊池沖之介先生」と安高主題の版画絵はがき「あさかのうた III」を掲載いたします。



恩師菊池沖之介先生

柳沼彌重 (46期)

昭和24年の事である。生徒自治会次期役員選挙の立会演説会で、一年生と二年生とが対立して、大喧嘩をはじめ、野次と怒号のうちに、全く收拾のつかぬ状態が起った。この起こりは、何処の学校にもある下級生の上級生への日頃の憤懣によるものであろうが、直接には、二年生の応援演者が、一年生の会長候補者は、左翼思想の持主であると、誹謗した事である。これに対して、一年生の応援演者が、「何をもって、左様なことを言うか、この場でかかる誹謗により、一年生会長候補者をおとしめることは甚だ卑劣である。二年生会長候補者こそ、過激な思想の持主である。お前達は、その分を弁えぬ過激派の集団である。」と対し、加えて一年側は、「この民主主義の時代に、上級生風を吹かして、我々を抑えつけようとするのは、まるで古い。」と応じた。その応酬の繰り返しのため、会場は、両方からの野次と怒号と、候補者を出さぬ三年生の面白半分扇動とで、大沸騰となった。顧問たる私は、相手の意見を冷静にきかぬ態度こそ、非民主的であると説いて、静まるよう大声で度々もとめたが、一旦、興奮し、沸きに沸いた若者達を静まらせるには私はあまりにも無力であった。

ついに顧問たる私まで、野次りたおされるというありさまであった。選管委員も興奮、両学年共に好機到来と一層騒ぎ、三年生は傍観を越えて、扇動、仲裁に入る気はなく楽しんでいく。30分以上もこの状態が続いて、静まる気配は全くない。騒ぐだけ騒げば、自然に静まるだろうとは思ったが、それまで延々と続けさせることもできない。あれこれ考えて末に、ようやく、菊池先生のおでましを頂ければ、或はと思いついた。菊池先生は、生徒の神様、更には母校の神様である。先生のお力に縋るしかない、思い到った。

当時、先生は、戦前戦中合わせて33年のつとめの後、一旦退職され、戦後再び二度目の母校勤務、齢すでに60歳半ばであった。白哲、吹けばとぶような小軀、きらりと光る眼鏡をかけた御姿は、豆ランプそのものであった。御老体に鞭打たれ、西郊外の八幡から、片道8キロを徒歩で、通勤されていた。その上二年生のHRTもなさっていた。その当時の母校出身の職員(17、8名)はすべて先生の教え子であって、先生の高い御人格に接し、深い御慈愛を頂戴し、先生の中に、まことの師の姿をみている者ばかりである。生徒達は、常々この職員達から先生の話の聴き、機会ある度に、先輩諸兄の話の耳にし、そして実際に教えを受けて、菊池先生が、安高におられることを誇りにしていた。

先生に、演説会の状況を申し上げ、

最早私の手にはおえない、生徒達が自ら最もよい道を決めるよう、先生のお力に縋りたい、と申し出たところ、即座に快諾され、同伴して会場に入り、暫く状況をみて戴いて、頃合いをみて菊池先生のお話をきくことにするからと静めて、先生が今日安高につとめられている次第を若干述べた後、先生に向って深々と頭を下げ、大声で、まことに面目ない事ではありますが、この私は、この大喧嘩をやめさせることはできません。先生の御力でおさめて下さい、とお願いをした。先生があの小軀で、ゆっくりと壇上に立たれると、騒ぎはたちまち静まった。暫く間において、先生は持ち前の大きなだみ声で「春風騎蕩とし云々……。」と漢詩で始められ、「ああ、今日はまことによかった。これ程に安積の良さ、安積の若者達の自由闊達で元気溢れる姿を今までにみたことはない。長い事、母校に勤めた甲斐がある。そういう諸君だから、目前の為すべきことを果たし得ると信ずる。結論を出すようにしなさい。」と極く簡単な御教示をなされた。この短い御諭しで、沸きに沸き、燃えに燃えた生徒達は冷静に戻り、日程を終了したのである。

常々、空元気で威勢ばかり目立ち、鯉職のような私は、このような騒ぎを静めるのには役に立たぬものとしみじみと感ずると同時に、白哲、小軀、老齢の先生のもつ御力は、何なのだろうか、と考えた。生徒達も恐らく同じ感慨であったろう。人を愛し、使命に徹



吾が桜章の健男児
山より高き
水より潔き
志操まで



して、生涯を生徒のためにうちこんだことによって得られたものと思う。それは単なる老練、豊かな経験などというものではない。人間の真価が、生徒達を静め、生徒達を感動させたのである。この人間の真価を即座に感じとった生徒達もさすがである。このような生徒達に接し得た私も卓れて幸福な教師であったと思う。私はこの出来事を何としても、他に知って貰いたいので、職員には勿論、安積で学んだ人々には機会ある毎に語っている。

「あさかのうた I」より

さようなら 柳沼彌重先生

中城まさお (63期)

ヤジウさん、柳沼彌重先生。

ほくの古いアルバムに安高生徒自治会発足の記念写真があります。初代会長渡辺太郎君 (63期) 以下選挙で選ばれた役員と顧問の先生方が写っています。その右端、黒い学生服を着て腕組みをしているのがヤジウさん。

この学生服のおかげでほくは先生を兄貴分ぐらいの年のかただと思っていました。実際は一まわり以上ちがったのです。戦後の混乱期を経て生徒会を創ろうという機運になり、ほくたちはまず規約づくりに熱中しました。連日、古い図書館で暗くなるまで議論を重ねました。ヤジウさんともう一

人、若い西山徳一郎先生も熱心で、ふり返ると大学等のゼミの、それも理想的な形がそこにあり、先生も生徒と同じ目の高さで議論に参画して下さいました。生徒会の名称に「自治会」という文字を入れたのは、旧制高校や大学の自治の精神にあやかろうという思いからでした。写真の委員の中には、初代応援団長長谷川猛夫君ほか体育部のモサの顔も並んでいます。ヤジウさんは生物学を通して知育に力を発揮されながら、応援団を良い姿にしてそれを校内徳育の一つの柱にしようとして、おられました。その辺がヤジウさんの滋味で、以後指導部長として成果をあげられるもとなったと思います。

高校の徽章の制定にも熱心で、広く生徒、職員から募集した案の中で、先生の創意が基調になったようです。

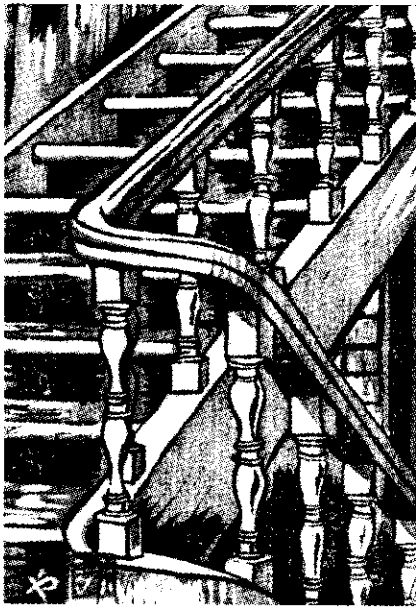
後年、先生は安高本校舎の保存に熱心でした。もちろん他の多くの方の御努力もあつての事ですが、ヤジウさんのそれは草の根運動というか、ことある毎に人脈を広げ、機運を高めて行かれました。それが実現した時は御自身は余りおもてには立たれませんでした。

近年、先生の版画が多くの人々の目にとまるようになりましたが、それはほとんどすべて安積の若人や本校舎を題材にしており、完成度の高いものでした。

ヤジウさんは昨平成9年11月6日永眠されました。生前先生は「みんな

が榮譽ある死にかたをさせてくれるんだ」と言っておられました。早くから御自身の癌とその進行状況を的確につかんでおられた先生は、奥様とお嬢様それに御親戚皆様の看護と、教え子である医師たちの加療に満足しておられ、無理な延命措置はとらず、御自宅で尊厳ある死を選ぶことに同意を得ておられました。多分そのことについて言っておられるのだらうと思ったし、確かにその通りになったのですが、それだけではありませんでした。郡山在住の教え子有志の発意で「柳沼彌重先生を送る会」が企画されていたのです。

御永眠の2日後、11月8日、母校と桑野の御自宅との中間、開成山の平安閣に300人ぐらいの人が集まりました。市長、国会議員ほか要職にある人、遠方の人、近所の方、教え子のほか現役時代の御同僚の先生方のお姿も目立ちました。世話人代表は星薫君 (64期)。宗教ぬきというが、素人司祭者たちは身を浄めて任に当たっていました。それが先生へのお別れを印象深いものにし、参会者一同の心も浄めました。御遺体は法人白菊会に登録されており、県立医科大学に献体される手順が出来ていました。応援団OBの紫魂会の旗だそうです。ほくはふと、国旗に覆われた大統領の国葬の榮譽を思い起こしました。幾つかの「送る言葉」のあと、銘々に白い花を祭壇に供えました。会場の壁際には現役応援団が並び校歌斉唱をリードしましたが、いよいよ柩を送る段になって玄関を出ると、彼等全



員が素足で底冷えする地面に立ち、「送歌」「天地の正気」「紫の旗ゆく所」「チャカホイ節」と応援歌を斉唱する中、車は門外へ静かに去り、安高正門前を経て福島へ向かいました。その経緯は武内博君（68期）が12月20日の産経新聞談話室欄に詳述しておられ、この稿でもお許しを得て一部参照させて頂きました。

ヤジウさんは御自身が安中で学ばれた頃の恩師の顕彰にも心をくだかれ、菊池沖之介先生ほかについて私家版の冊子をつくっておられました。

安高、安女が共学化しそうな情勢についてかねてから反対の御意見を持っておられました。かくいうはくも、男子校が日本でただ一校になれば、かえって存在価値が増すはずなど申しあげると深くうなずいておられました。

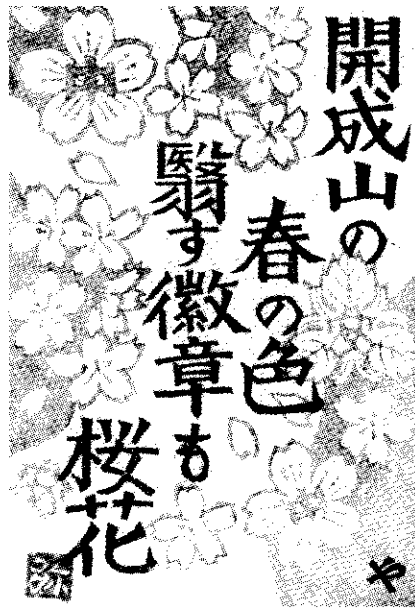
永眠される数日前、御病状悪化を伺って郡山の御自宅をお訪ねした時、奇跡的に元気を取りもどされ、短時間ながらお話し出来ました。「俳句が浮かんだ」と言われるので書きとめました。

八十路すぎ老後は家族にめぐまれて
ダイバーをにらんで骸骨幼な顔

（平成9年10月27日）

2句目は報道写真で沖縄の海に眠る戦没青少年男女の遺骨を目にされての作との事でした。

（劇作家）



柳沼彌重先生を偲ぶ

川井栄一郎（65期）

先生が長年続けてこられた版画年賀状が途絶えてから数年になるが、今年の11月に先生の訃報に接した。

先生は昭和23年6月に生物教諭として安積に赴任され、爾来約20年間、教鞭と共にご苦勞の多い応援団の顧問として積極的に活躍されてきた。

訃報に接し、かねて惠贈をうけた先生の「自分史」の断片である「あさかのうた」の「I 恩師菊池沖之介先生」「II 餓鬼大将」を読み返してみた。

「I 恩師菊池沖之介先生」は当然恩師中心の追憶であるが、生徒会自治会役員選挙、英語教諭の更迭問題等もとりあげられている。

また、「II 餓鬼大将」では「赤ボス」「初の応援団旗」「応援団の体質」「仮装行列」等応援団の顧問としての思い出、苦勞話があり、40数年間をタイムスリップして安積で過ごした日々を懐かしく思い出させた。

先生は旧制安積中学校には僅か一年半の在学に過ぎなかったと伺っているが、「あさかのうた」、安積の校歌、応援歌に題材をとった版画、安積歴史博物館の実現に向けての情熱等、人一倍安積への熱い思い入れが感じられ、誠に安積思いの先生であった。

先生のご遺体は献体されたと伺って



いる。先生のご冥福を心からお祈りしたい。

合掌

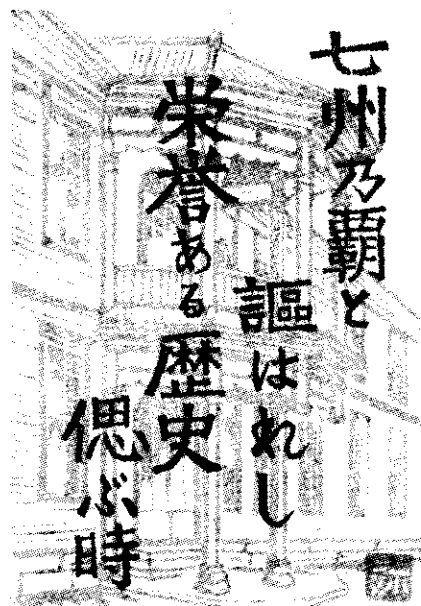
（山武ハネウエル監査役）

柳沼彌重先生のこと、 安積開拓のこと

塩谷哲夫（71期）

昨秋は悲しい郡山訪問であった。安高の恩師、柳沼弥重先生の訃報を聞いて通夜の席に急いだ。先生は現在私が勤務している東京農工大学の昭和17年、私の生まれる2年前の林学科の卒業である。この大学に来てからそのことを思い出して、収穫時期に大学農場産のパレイショや野菜を、正月には餅を贈った。私はいま大学農場の農場長をしている。病床の先生から「母校の農産物を食べることが出来て嬉しい」という手紙をいただいて私もうれしかった。先生は特にブルーベリージャムがお気に入りだったようだ。私は取り急ぎ手にしてきたジャムを御霊前に供えた。

帰り道、何も考えることがなく、車の窓から流れるシルエットを眺めていた。開成山の通りにのぼりがはためいている。目をこらすと、「開拓サミット」と読めた。へーっ、郡山でこんなことをするのか。街の人達はどんな思いでこののぼりを見ているのだろうか。ちょっと戸惑いの気持ちが走った。街育ちの私が子供心に郡山の誇り



としていたことは、「郡山は東北一人口密度が高い商工都市である」といった郡山の都市的側面についてであった。そんなことを地図帳の後ろの統計表で確認して、なんとなく“都会”の郡山人であることの優越感に浸ったりしていたことを思い出す。

しかし、元とは言えば、郡山の発展の基礎となったのは安積野の農業開発だった。農業・農学の仕事をすることになった今では、昔とは反対に、郡山が日本の近代化の過程で行われた国営農業開発の発祥の地であったことや、そのために開削された日本3大疎水の一つである安積疎水を誇りに思ったりしている。我田引水、勝手なものである。

安高への行き帰りに、毎日、疎水べりや開成山を通ったのに、この地を開いた農業開発には思いが至らなかった。私が安高生だった時の社会科の高橋哲夫先生が1963年に『安積開拓史』を、1983年には『安積野土族開拓史』を、1994年に『安積の時代』を刊行されている。しかし、当時、私は不勉強にして、安積開拓のことを知らなかった。

ところが、実はわたしの母方の先祖は、この安積開拓のためにはるばる鳥取藩からやって来たのだと、郡山を出て大分経ってから知った。母に『坂井家道中日記』を見せてもらったことがある。郡山と鳥取との交流については、昨年暮れにNHKの番組や郡山のタウン情報誌『街こおりやま』(1997年12月号)で詳しく報じられた。

今では開成山に、開拓の祖・中條政恒公(1932年)の碑と並んで安積野開拓顕彰碑(1983年)や「開拓者の群像」が建立されており、市民にも郡山発展の基礎を築いた先達たちの功績を身近に知ることが出来るようになっているのだろうと思う。「開拓サミット」は、単に発展の歴史を振り返るだけでなく、周辺の農村地域、森林地域をも統合して広大な領域をもつに至った郡山が、来るべき21世紀の新時代にふさわしく、農業や商工に偏することなく、都市・農村・自然の調和した市民社会の新たな“開拓”を目指すことを、広く宣言する場となるのだろうか、私なりに勝手な思いをめぐらした。ただし、実際には何が行われたかは知らない。

病床の柳沼先生とも、郡山市長選を前にして、郡山の都市域と農村地帯との調和について話し合ったことがあった。先生は自宅療養しておられた。訃報は先生の娘さんからであった。「父が亡くなりました。家で、普通に…」と。病院でなく自宅の布団で家族に囲まれて大往生出来るのは今時希有のことかもしれない。先生は最後まで、奥様や娘さんに、いばって好きなことを言っていたのかと…幸せなことだと思おう。通夜の席は寂しかったが、お別れ会は大層賑やかであったと耳にした。安積の紫の旗を先頭に応援歌で送ってあげたのだろうか。そんな光景が頭に浮かんでくる。

(東京農工大学教授)

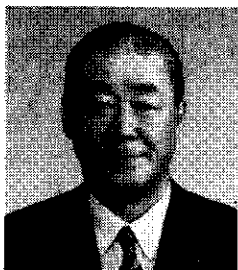
献体する恩師 厳粛に送る会

石川 功 (68期)

先月82歳の天寿を全うされた高校時代の恩師の葬儀は、故人をしのぶにふさわしいセレモニーだった。恩師のY先生は母校の生物の教師として23年間奉職されたが、その間、応援団の顧問を務められ「泣く子も黙るY先生」と言われたほど生徒指導には厳しかったが、半面、常に生徒の立場に立って物事を判断することを信条とされていた。さて、そのセレモニーだが、恩師の「葬儀はせず、遺体は県立医大に献体するように」との遺言もあり、卒業生有志の首領で「Y先生を送る会」の形で執り行われた。式場はY先生の遺影と遺作の彫刻を白菊の花で囲んだ質素なもの。母校の現役応援団が佇立する中で参列者一同が黙とうした後、校歌を厳かに合唱し、各卒業期の代表が送る言葉を述べ、参列者が菊の花を供え、献体のため別室の用意された紫の応援旗に、包まれた棺を応援歌を合唱しつつお見送りするという、極めて厳粛な「送る会」であった。小春日和の晩秋の午後、悲しくもあったが、さわやかでもあった。ジミ婚があるのだからジミ葬儀があってもよいのではないかと、葬儀の目的は何なのか、そろそろ原点に立ち返って考えるときがきているのではないかと。(元団体職員)

ご挨拶を兼ねて 近況報告を

安積桑野会会長 **今泉正顕**



平成10年度の東京桑野会総会の開催おめでとございます。在京の各界の同窓生の皆様が、それぞれご活躍のことは、常々拝聴し、大変心強く思っております。

私は、昨年9月の桑野会総会で、渡辺信雄会長のあとをお引受けして会長に就任しました、56期の今泉でございます。郡山商工会議所の専務理事、副会頭を歴任し、福島県二番目の民間テレビ「福島中央テレビ」(日本テレビ系列)の創設に参加し、専務、副社長、社長を経て、現在同社取締役会長を勤めております。

安高の関係は、滝田元二理事長の下に、開設以来、財団法人「安高歴史博物館」の館長をさせていただいております。

東京桑野会の皆様には、ご挨拶を申し上げる機会がなくて失礼をしておりましたが、このたびの4月28日(火)の総会には出席し、皆様と親しくお目にかかれましてを楽しみにしております。

さて、母校の近況でございますが、去る3月1日、第111期の卒業式があり、同窓会から、成績優秀な卒業生に「樗牛賞」「新城賞」「朝河賞」の三賞を授賞してまいりました。

校門前の道路拡幅工事も完了し、新しい校門、松並木に添った立派な歩道が出来上がりました。

「安高歴史博物館」(旧本校)の一室も、昨年郡山市が「安積開拓120年」を記念して作成した展示したパネルの一部を市から寄贈を受け、「安積開拓と安高」の関係を展示することができました。

校歌・応援歌も歴史とともに変調してきていますので、これも関係者に集まっておいただき、武蔵野音大教授・二期会のバリトン歌手小田清さん(60期)の吹き込みで、正調の校歌・応援歌をCDにして近く発売することになっております。

紙数の関係もありますので、その他のご報告は、総会に参上した節に申し上げることにいたします。

安積の近況について

学校長 **渡邊專一**

東京桑野会の皆様には、常日頃、母校に対しまして暖かいご支援、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。とりわけ、野球部の関東遠征の際には特段のご配慮をいただき、厚くお礼申し上げます。

お陰様をもちまして、114年目を迎えるとする母校は、ますますの充実・発展を遂げておるところでございます。

さて、母校の近況について申し上げますと、まず昨年度の大学進学率におきましては、現浪併せて国公立大206名、私大638名、その他を含めて総計855名の合格者を出しております。中でも東北大の28名は県内第一位でしたし、私大では、早稲田の46名、中央大の36名が東北地区で第一位となるなど大きな実績を残したところであります。

部活動では、水泳部の活躍が特筆さ

れます。特に400フリーリレーでは、各種大会で次々と記録を塗り替え、高体連県大会での8年振り総合優勝、新人戦県大会での9年振り総合優勝を遂げる原動力となりました。更に東北高校新人大会でも、400フリーリレーを大会新で優勝、水泳団体種目として本校に初の栄冠をもたらしました。その他、剣道が県高体連・県総体で団体・個人とも優勝、ソフトテニス新人戦県大会で個人戦優勝、陸上の砲丸投げで県高体連一位、東北新人大会で第二位、囲碁が全国高校囲碁選手権大会で優勝、放送部、写真部の全国大会出場、合唱部の東北大会入賞等、文武両面にわたってのそれぞれの部の活躍がみられました。また、本年度は紫旗祭(学校祭)が8月30日(土)～8月31日(日)と開催され、安高生の活躍の様子を市民の皆様にご覧いただきました。

また、新年を迎えました元旦には、根本匠代議士、藤森英二市長、山口勇県議を始め、同窓会長、桜桑会長、PTA会長等をご来賓としてお迎えしながら、恒例の安積高校関係者名刺交換会(新年会)を神社会館にて盛大に開催し、新春を言祝ぎますとともに、母校の益々の充実発展を祈念したところです。

最後になりましたが、東京桑野会の皆様には、益々ご健勝にてご活躍されますようご祈念申し上げますとともに、母校にたいしまして、今まで同様一層のご支援とご指導をくださいますようお願い申し上げます。

彩色用ゴム製品で世界のトップを行く ————— 工業用精密ゴム製品製造



- ◇創業 1970年
- ◇売上高 30億円
- ◇資本金 2億4645万円
- ◇従業員数 200人

社長 伊藤 巖 (65期)

本社 〒334-0073 埼玉県川口市赤井3丁目3番7号 Tel. 048-285-2251(代表) Fax. 048-285-2254
大阪営業所 〒536-0016 大阪市城東区蒲生1丁目12番10号 京橋アドバンス21-205 Tel. 06-930-2521
福島工場 〒969-0101 福島県西白河郡泉崎村大字泉崎字坊頭窪1番地 Tel. 0248-53-3491 Fax. 0248-53-3493

灯火

岩谷萬治 (40期)

鍛える

郡山の町には安積中学と安積女学校の二つしか上級学校はなかったの、町の人達は安中、安女と言って、一目おいていた。私は安中一年生、時は大正12年だった。

当時校風というか、たるんでいるやつを鍛えるのか、いろいろの誓約があった。誓約を守らなかった生徒に、月に一回の集会で、制裁を加える。私は活動写真が大好きで、学校の許可がないのときどき禁を破った事がある。「枯れすすぎ」の時も大評判だったので見てしまったが。あの時は大勢の客の中に安中生がだいたいみたいたった。

この月、集会があった。大きな講堂に全校生徒が集められ、先生は教頭だけ入り、扉はしめられ、五年生全員が検閲をする。私たち一年生は最後に並んでいるが、上級生も何人かビンタをもらっていた。敬礼をしなかった。タバコをすった。盛り場をぶらついたなどだったようだ。次第に私たちの方に近づいて来る。枯れすすぎがバレるか、胸がどきどき。

背高ノッポの五年生が私の前に止まった。人差し指で私のひたいをちょっとつついた。

「おめえ、こねえだ、女学校の前の風呂屋さ行ったべ」ときた。「私の所の風呂屋が休みだったので行ったし」と答えた。女学校の前の風呂屋は小さくて、五人も入ると一杯になる。上がり湯が仕切られているが、男女共同だった。手ぐらいい見えるのではないかしら。寄宿舎の女学生が時々入りに来る

らしくて、上級生たちのあこがれだったのかもしれない。私は中学生と言っても子供で、何も気がつかなかった。

「チンチエークせに女学校の前の風呂屋さ行くなんで生きてだ。」他の五年生も集まってきたが、私が小さいのがっかりしたようだった。この中の五年生の一人が考えた。この一年生が風呂屋に来たのを見たのはあいつだと気がついた。「徳田…、徳田…」とさげんだ時、あの背高ノッポの五年生はいなかった。どこへ消えたのだろうか。彼の家は女学校の前の風呂屋から二キロもはなれているのだった。

街角

大正十二年。私は郡山の安積中学の一年生でした。ある日曜日、「会津中学と野球試合があるから応援にこい」との通知を受け、学校へ応援にかけつけましたが、二対一で敗けてしまいました。

応援団長や五年生がおこりました。会津中学は礼儀を知らぬ、我が校が招待したのだから武士として勝ちをゆずるのが当然である。しかるに何ぞや。我々は彼らに制裁を加えるべきである……と言う訳です。

一、二年生は麓山公園の裏道を、三、四年生はさくら通りを、我々は東通りを会津のやつらの後から行く。そして車で制裁を加えるのだと言われ、駅を目指してはりました。

駅前旅館の裏の街角は二年生、その次の小さい街角を私達一年生が待ちぶせるということでした。いつまでたっても何の連絡もありません。駅から汽笛の音がポーポーと聞こえてくるだけです。私たちは無言で顔を見合わせていました。

一時間くらいたって四年生がとんできて「みんな早く帰れ、駅前に出ずに裏通りから帰るようにしろ」と言われ

ました。

会津の連中をなぐったのか、なぐらなかつたのか何が起ったのか起らなかつたのか分らない。ただだまっているだけでした。しかし会津中学に二対一で負け、駅まで走ったことは間違いありません。

今は安積高校です。70年近くも前に学んだ校舎は文化財として残っています。先日尋ねたら同級生がいて、思いつき出話の末、この話が出たら、顔色を変えてそんなことはなかったと言いました。議論になろうとしたら、若い事務員が「大正12年の、野球部の記録に会津との試合はやっていません」と、厚い本を持ってきましたが、私はだまって帰りました。郡山駅前にはビルが林立です。私たちがあの時たむろした街角はありません。ふる里は遠く遠くなりました。

(本人文集「灯火」より転載)

朝河博士の没後50周年を迎えて

—故阿部君を偲びつつ—

柳沼八郎 (50期)

時は流れ、人の生死が続く。永遠にかどうかは知らない。何故なら地球そのものの危急が叫ばれ、存亡が論ぜられている昨今だからである。とはいえ世は、宇宙時代に入っているという一面もある。われらの大先輩であり、世紀の碩学朝河博士が在世されたら、今をどのように評されたであろうか、また新世紀の人類と日本の進むべき道を如何に展望し、示唆したであろうか。

このようなことを考えながら、生誕120周年記念の「朝河貫一の世界」(平成

伊豆歯科医院

東京都港区新橋6-2-8

TEL. 3434-0231

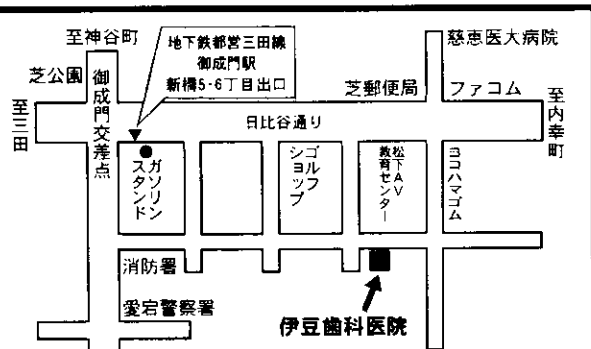
74期 伊豆 秀雄

◎健保取扱い

◎電話予約制

◎休診日/木・土・日・祝日

◎診療時間/10:00~13:00 14:00~17:30



5年9月刊)に続いて、一昨年からは、没後50周年記念の「甦る朝河貫一」の刊行(本年1月1日初版)ならびに頒布と本年度の昇天記念行事に向けて、朝河貫一研究会の顧問兼監事として、微力を傾けているのが昨今の私である。

博士の偉大さは、人格の高潔さと歴史学者としての学殖の豊かさ、そして透徹した批判精神に発し、不動の信念にもとづく実践(日米戦争回避のための親書起草、大隈首相への痛烈な外交批判書簡など)にある。このような博士への傾倒と顕彰事業へののめり込みは、不肖の私に限らない。博士の悲恋物語りの発掘にその語学力をフルに発揮し、「人間朝河の知られざるヒューマン的側面」を前述の新刊「甦る朝河貫一」(95頁以下朝河貫一・後年の愛の渴望についてと題する)に彩を与えている石川衛三君(57期宇都宮大名名誉教授)、とともに、朝河研究会の中心的役割を担うこと長く、今回の新刊では編集長の重責を果たした中国問題の権威である矢吹晋君(70期横浜市立大教授)をはじめ、外にも研究会々員には安積出の顔が揃う。

ところで、博士をめぐる顕彰事業にとって最も重要な先駆者は、外ならぬ「最後の日本人」の著者阿部善雄君である。この本は私が戦後やり直しの早稲田に学んでいた頃、私を朝河学に入門させた安中同期の彼のライフワークとなった。私が彼に誘われた日本橋三越本店での「遺品展」(28年10月)が、私の朝河博士との出会いであり、彼とのペアーを組んだ博士顕彰への第一歩となった。その後彼がこの「最後の日本人」発刊の折に私に呉れた手紙の中でこの本が「私の畢生の作品となるかと思えます」と述べていたが、彼はその後2年余にして他界してしまう。享年66歳で、博士よりも8年も早い。

この5月には彼の13回忌を迎える私も安中50期が、卒業60周年記念の集いを、この春4月5日に上野公園内の韻松亭にセットしているというのに。まさに、「死者は還らず」である。かくて私たちは、これからも博士の後進として、忠実に歴史学者の道を行って去った彼の遺業を真面目に進めなければならないと思う。彼の遺言執行でもある。そのわれわれのひそかな願いは、博士に続く立派に世界に通用する国際人が後進から続々と現れることである。その意味で、新刊「甦る朝河貫一」(絵はがき附)こそ、ぜひお奨めしたい。特に珠玉のことは必読。(弁護士)

この地球 共に笑顔でくらしたい —NGO「カラ=西アフリカ農村 自立協力会」とともに5年—

高橋(旧姓矢吹)ユミ
(昭34安女高卒)

西アフリカの国々に対する私達日本人の関心は、情報の少ないこともあり、極めて希薄と言えます。西アフリカは、サハラ砂漠の南から、大西洋のギニア湾に至る地域を言います。これらの地域の国々18カ国(大西洋に浮かぶ島々の国カボベルデを除く)で構成されており、海に面している国は14カ国、内陸国は4カ国から成り、総面積は約820万km²と、日本の約22倍にあたります。

私が代表をつとめる西アフリカ農村自立協力会(カラ=CARA)の活動の第一歩は、私の大学時代の友人である村上一枝さんが、1990年8月より、マリ共和国マディナ村に単身住み込んだ時

に始まりました。彼女が、診療所を是非、村に建てたい、と強い希望を抱き帰国、相談を持ちかけられたのが、私にとっての第一歩でした。当時、大手商社の取締役の地位をけて、好きなアフリカを旅行していた、森林学を大学で専攻し、東南アジアで農水産物の商品化に活躍した、野澤眞次氏と知り合い、3人でこのNGOを立ち上げたのが、1992年8月でした。この頃は、日本のNGOの設立が相次いだ時期でしたが、アフリカを活動地とするNGOは極めて少なく、マリ共和国にいたっては、僅か3団体にすぎませんでした。これに比べ欧米のNGOは、マリだけでも150以上の団体が活動しており、アフリカにおける日本のNGOの非力を痛感させられたことでした。この中にあってカラは、現地代表の村上一枝を中心に、援助慣れしているマリの農村に住む人達に対し、村民が自分の意志と力で生活自立ができるよう、各種の学習から取り組みました。外部からの援助物資に依存しない意識の改革が目的でした。これらの学習が効果をあげるようになりました。具体的には、農村自立に取り組む前に時間をかけ、村民達のニーズの聞き取り調査をしました。その結果は、どの村でも、①水および食料の確保②病気の無い健康体の維持③換金のための技術習得、の三点に集約されました。これらのニーズをふまえて、カラの活動は組み立てられました。

私自身は、無償の支援をしてくださる会員340名、及び寄付者、専任で無給の村上現地代表、野澤事務局長には、いつも頭の下がる思いをしながら、活動についての責任を自覚しつつ、活動がつつがなく続行されるよう現状を常に把握し、活動の喜びを会員一人一人が感じることができるよう微力ながら

Kinden
CORPORATION
電気設備

株式会社 **きんでん**

東北支社 〒980 宮城県仙台市青葉区立町27-21 仙台橋本ビルディング6階
TEL. 022-227-1265 FAX. 022-224-8071
福島営業所 〒963 福島県郡山市清水台1-6-2 山相郡山ビル2階
TEL. 0249-23-5193 FAX. 0249-23-5177

東北支社顧問 土屋七郎(57期 東京桑野会副会長) 東北支社長 増田輝雄

心配りを続けて来たつもりです。

現在活動はマリ共和国クリコロ県ク
ーラ郡内の17カ村、32集落、約15000人
を対象とするまでに拡がって来まし
た。村民達の生活自立への旺盛な意欲
と行動が、少しずつ着実に成果をあげ
てきて、すでに、カラの支援の手から
離れ村独力で生活向上に取り組む村々
が現われてきているのは本当にうれし
いことです。

一方、東京事務局では、財政基盤強
化に取り組み、マリ共和国での活動費
用の確保、中でも助成金に依存しない
自己資金比率の向上に努力し、「カラ・
カレンダー」の発行を続け、基本金に
900万円を組み入れることができました。
しかし、昨今の世界の経済状態は厳し
く、楽観できません。考えてみます
と、私個人としてはNGO・ODAの何た
るかも知らずに始めたこの活動により
新しい世界が開けました。日本で集め
た資金を炎熱のサハラの南、砂漠化に
苦しみ、飢えと病氣と闘い、知識に飢
えている西アフリカの人達のために役
立てる喜び。この喜びをいろいろな方
々と分かち合う喜び。情報収集のため
にインターネットをはじめ、ニューズ
レターの製作等会員相互の連携、助成
金、寄付金のお願ひ等々の困難と喜
び。今だに度々の要請にもかかわらず
現地へ行けない状況ではありますが、
日本で友人、知人をまきこんで、こ
れからも続けて行きたいと思ってい
ます。

東京桑野会会報に、このような機会
を頂戴できるとは思ひもかけないこ
とでした。幼い頃の生活を思い出しな
がら書かせていただきました。ありが
うございました。

(高橋矯正歯科医院)

後輩の活躍ぶり

西山容子 (安女高6期)

1月半ばに降りにふった大雪が未だ
溶けず根雪となって道路のあちこち
うず高く積まれています。ニュースに
撮り出される都会の人々の足元が何
と危かしく見えた事でしょう。

突然原稿依頼を受け、あつかましく
もお引受けしてしまいあわてている私
ですが、東京桑野会は発足当時主人達
が大変苦勞した事を聞かされておりま
したのでこれもご縁かとおつたないペン
を取りました。

私が主人の転勤に伴い大阪、東京、
再び大阪そして故郷に帰ってかれこれ
20年の上になりました。その間の郡山
の変わり様には目を見張ります。人口33
万余、世帯数も昨年末で11万4千余り、
まさに中核市にふさわしい街へと努力
の真直中にあります。

朝夕の駅前通りは通勤、通学の人々
で賑わい、その中で白いルーズソック
スの女高生が特に目立つ様な気がしま
す。若い人々の間で方言が聞かれなく
なり、私をはじめの大阪での暮らしの
頃との隔は全く感じられません。あの
当時郡山出身と云えば大和郡山かと聞
違えられまして、「安積」アサカとは読
んでもらえなかったのですから。もし
かしたらそれに大きな貢献をしたのが
安積女子高校合唱部だったようです。

私が合唱部に在籍した昭和26年から
29年にかけて合唱コンクールが盛ん
になりました。入学と先生の転職とが同
時だった私達は、山下「旧倉世古」先
生の魅力と相まって一気にコンクール
への道をひた走り出したのです。放課
後の練習を終え満足して通学列車に飛

び乗ったあの頃の胸躍る青春の日々は
まさに私にとってのゴールデンエイジ
でした。あれから幾星霜、今母校安女
の合唱部は18年連続日本一の栄冠を得、
さわやかな歌声と共に郡山の誇る団体
に成長しました。先輩としてこんなう
れしい事はありません。

テレビに写る彼女達は百名を越す大
世帯にも拘わらず、整然と入場し、各
人が百分の一の音量でまるでコンピュ
ーターに造られた音楽のように正確で清
澄な肉声と音を響かせて私達を感動に
さそうのです。選曲もあの当時とはす
っかり様変わりしている様です。現代
音楽特有の高度な和音とリズム、そし
て伴奏としてではない立派なピアノ譜
等、合唱界も40年の間に確実に変わ
って来ています。それを見事にクリアし
高校合唱界に君臨している母校の合唱
部に乾杯！です。(郡山在住)

学ぶという行為の 重要性を学ぶ「場」

平石隆生 (101期)

安積を卒業してちょうど10年がたった。
現在は、東京の某広告制作会社で働い
ている。朝から深夜12時過ぎまで、土
日もお構いなくひたすら働いている。
といっても俗に言う「会社人間」とし
て、私事をなげうっているわけではない。
「仕事が好き」ただそれだけであ
る。

「金が欲しい」「人の役に立ちたい」
「名声を得たい」…、人が仕事を通じて
望むことはさまざま。自分の場合
は、何が仕事のモチベーションになっ
ているかと考えると「自分の知らない
物事を学べること」と断言できる。仕
事上、業種・業態を問わず、さまざま

営業品目

- 煙突・公害防止関連機器
- 貯槽・塔槽類
- 鋼構造物

上記品の

- 設計・施工監理
- 点検・調査・診断
- 製作・建設



株式会社 富士ハイエンジニアーズ

一級建築士事務所

〒105 東京都港区新橋4丁目21番7号

つるや加藤ビル

TEL (03)3434-1611 (代表)

代表取締役 遠藤 修 (67期)

企業や団体と深く関わることになるのだが、その過程で表層からうかがい知ることのできない「仕組み」や「構造」といった物事の本質に触れられた時の喜びは、何物にも代えがたい。もちろん、社会を知らない若輩者であるがゆえの考え方なのかもしれないが、そうした喜びは年齢とは関係なく、普遍的なものであり、そこに喜びを感じることも事体、人間たる所以ではないかとさえ思っている。しかし、そうした物事の本質を理解するためには、地道な努力と論理的な思考能力が不可欠であることも最近実感している。さらに、そのためには学生時代の「勉強」が極めて重要だったと心底思っているのだ。振り返ると本当に勉強しなかった。授業中に居眠りはするわ、抜け出して遊びにいくわで、先生方にも多大な迷惑をかけた。なぜあれほどまでに勉強をしなかったのだろうと最近よく思うのだが、勉強という行為の目的や重要性をまったく理解していなかったからだろう。勉強は、物事を論理的に考察し、答えを導き出していくという思考能力を身につける上で非常に重要だし、専門分野を深く学ぶ上で必要な一定レベルの知識を習得するという意味でも大切だ。が、まったくもって残念なことに、高校時代、自分は勉強することを怠った。今、その遅れを取り戻すべく、仕事を通じて能力向上に取り組んでいるわけだ。

安積には進学校として、志望大学への合格を優先した教育体制を持つ義務もあるだろう。しかし、単なる塾まがいのような学校ではなく、学ぶことの意義や価値を学ぶ「場」でもあるはずだ。自分はそれを有意義なものとすることができなかつたが、後輩たちには大いに活用して欲しいものである。

(広告制作)

皆、元気かな？

渡辺 弘 (84期)

私が安高を卒業してから、もう27年もたとうとしています。冷静に考えれば、その直後の大学生活の方が1年長いし、会社に入ってからには既に20有余年で、圧倒的に長い訳ですが、今でも安高時代の3年間は、極めて懐かしく、昨日のことに明快に憶えています。楽しいこともあったし、悩んだこともありました。今考えると、“穴があいたら入りたい”ほど青臭い、未熟な理屈を主張したこともありましたが、どれもこれも、非常に懐かしい……。皆、元気かな？ 合宿所(今はもうなくなったという噂を聞きましたが)でクラス合宿をし、内緒で煙草(多分ハイライトだったかな)を吸ったり、一度自宅に戻って一升ビンを持ち出し、校庭の満開の桜の木の下で回し飲みをした後、グラウンドを走り回って泥酔したり……。本当に昨日のことに懐かしく思い出します。あの頃の年代でなければできないことを、ある程度はやったという実感はあります。特に“自由な校風”の中で自分の主体性をもつことの重要性を理解できたことは大きかったと思います。

その後、私は大学を出て、日本テレビに入社しました。21年間バラエティ番組を作り続けました。(最近の作品マジカル、夜もヒッパレ、24時間テレビ等)そして昨年9月から営業部長として、今度は番組という商品売る立場になって、昨今の不景気の中頑張っている所です。いずれにしろ、安高の3年間の記憶は、いつまでも鮮烈に残ることでしょう。

(日本テレビ営業部長)

王様万歳

橋本伸一 (63期)

古びてセピア色に変色した一枚の写真がある。昭和22年9月安積中学(現在の安積高校)文化祭の英語劇上演の記念写真である。題は「王様万歳」。配役 王様一橋本伸一、姫一中城正男、隣国の王子一鶴沼直雄、他一古川清・斎藤俊・大津隆・大橋力雄など名入りのポスターも写っている。

ストーリーは、姫に若い王子がプロポーズ、そこで王様が婿さんの資格審査。「ハウメニ スターズ アーゼア インザスカイ」と、とんち問答を中心にドラマが展開、見事合格、めでたしで終わる。王様や出演者の衣装、冠や剣などはすべて手作り、唯一の女優、中城君(男子校)のドレスやメイクは彼の母君のたすけで仕上げた。当日の大講堂は市内の女学生も加え大入満員。そして、ブラボーの歓声が幕が下りた。50年前“わか草萌ゆる安積野や”と謳歌していた旧制中学最後の年である。

当時の出演者は、今65歳を超える。それでも現役組は多い。中城君は奥さんと一緒に劇団「新芸術」を結成し、代表。鶴沼君は肝臓内科の権威で、三井記念病院の副院長。古川君は数カ国の大使を歴任、東宮侍従。斎藤君は大同特殊鋼の監査役。大橋君は自分の税務会計事務所を持ち、大津君は量販店オオツヤのオーナー社長と多彩。仲間うちでは今も私は伸ちゃんである。

いつのころからか東京で毎年クラス会を開き、杯を交わしはるか青春の夢を追ひ、実りの白秋への想いを語る。母校安積高校は、福島県で最も古く、当時の学舎は安積歴史博物館となつて

小橋クリニック

院長 小橋主税 (86期)

福島県須賀川市仁井田大谷地172-3
TEL 0248-72-1555

いる。(安川電機社長)
日本経済新聞「交遊抄」より転載 H9.9.27朝刊

東京桑野会の旗

中路 信 (65期)

毎年の東京桑野会総会会場を飾る紫の旗は、製作されてから今年で30年になる。

丁度一世代を経過したので、この旗の経緯と、当時の思い出を記録しておきたいと思う。

その頃の東京桑野会は、総会への出席人数も少なく、勿論現在のような立派な会報もなく、各年度の在京者名簿さえ揃っていなかったようであった。

当時の会長は、壁谷祐之さん(大正7年30期)で、これを大変憂慮し、東京桑野会のシンボルとしてこの会旗を作り、会の活性化を図ろうと決意されたのであった。

昭和43年、私は、会の年度幹事をしていた同期の津野宣夫君に誘われ、それまで会の存在も知らず、全く無縁で過ごして来たこの会のお手伝いをするようになった。銀座の交詢社で行われる何回かの総会準備の幹事会に顔を出し、最年少であったから先輩方の使い走りをするようになった。

壁谷会長から「会旗」を作れと命ぜられ、デザインをどうするかで困った。金は先輩方が工面すると言うものの変なもの作れない。考えた末に思い出したのは母校の恩師「水田荘介先生」である。安積の先輩(大正14年37期)で美校(現東京芸代)出身、母校愛が強く、昭和23年安積高校の新校章制定の時の選考委員であり、かつ、ご自身で「安」の字を桜花にデザインし

て、校歌も応援歌も「安中」から「安高」へのそのまま引き継げる新校章にして下さった方であるから、必ずや良いデザインをして下さるに違いないと考えた。先生にお手紙を差し上げ、高校卒業後十数年のご無音を綿々とお詫び申し上げた上、会旗のデザインをお願いした。

水田先生は、かつて担任したクラスの教え子をよく覚えていて下さり、早速に慈愛溢るお手紙と共に、彩色された会旗のデザインを送って来て下さった。会長に報告したら、大変喜んで、これに決定し、「東京桑野会」の題字は、橋本万之介参議院議員(明治27年11期)の揮毫をとることにされた。その時、会長から「万之介さんは一橋の大先輩でもあるからね」と言われたことを思い出すが、当時の私には、遠い大先輩のことは別世界のことのように思われ、キョトンとしていた。

このデザインを持って馬喰町の「三上旗店」に行き、製作を注文した。老舗だから丁寧に應對してくれた。「デザインには忠実に」と「長年経っても、色あせがしないような染色を」の二点を、くどいほど注文した。30年経った今、この店の前を通る時、店の人達の誠実さを懐かしく思う。製作費は金額はよく覚えていないが、旗の受渡時に現金決済をしたので、当時の私の月給の何倍かしたように思う。

この年の11月開催の総会は、会旗が出来たこともあってか、出席も良く華やかであった。会旗のデザイン作成の水田先生が特別招待されたので、私も久しぶりに先生にお目にかかることが出来、面目をほどこしたのであった。

壁谷会長が、同期生の芥川賞作家「中山義秀さん」や、現会長の「澤田さん」に、この総会に出席してもらうのに大奮闘されておられたことを思い出

す。

中山義秀さんは、食道ガンを手術された後で、包帯が見える着物姿であったが同窓生との会合を楽しんでおられる様であった。たしか、この時壁谷さんと一緒に撮った写真が、文芸春秋の看板グラビアの「同級生交歓」に、総会直後の号で掲載され、同じ号に母校校舎の写真も掲載されたことと記憶する。中山義秀さんは、その次の年の8月にお亡くなりになったから最後の総会出席であったと思う。

澤田さんを遠くから見たのも、この総会の時が初めてであった。「日銀に“澤田天皇”あり」と商社や銀行から恐れられている人だと、先輩方が言うのを聞いて、どんな人だろうと思っていた。当時の澤田さんは、現役のバリバリの時であったから、眼光鋭く威風あたりを払う風情で、確かに評判通りのお人と仰ぎ見ていたのだった。壁谷会長が「いずれ東京桑野会は、この人に託して活性化をせねばならない」と必死になって努力されていた姿が目につく。現在の若い世代の会員は、好々爺然たる澤田会長のご様子しか知らないと思うので、敢えて30年前の様子を記録しておきたい。

この総会で、呑気者の私も、安積の先輩・後輩の絆を強く意識するようになったが、その後の総会には、海外出張や会社業務の多忙にかまけて欠席することが多くなってしまった。

退職した最近では、また出席出来るようになり、先輩・後輩にお会い出来るのを楽しみにしている。年に一度、懐かしい「会旗」に会い、蛮声をあげて校歌や応援歌を唱うのも楽しい。「会旗」を大事に引き継がれて来られた幹事の方々と、この会旗作成のため情熱を注がれた今は亡き諸先輩に、深く感謝申し上げたい。

株式会社 東京シンクサービス

●業務 特許公報の抄録・翻訳、工業技術の指導・調査

●特色 高齢者の雇傭

(全従業員91%が60才以上、70才以上は54%)

〒101東京都千代田区内神田2-13共同ビル

電話 (03)3254-5805

相談役 鎌田 正二(43期)

旧ソ連にはじめて ゴルフを持ち込んだ男

古川 清 (63期)

自他共に認める「ゴルフ狂」古川清氏の記事が昨秋「日本経済新聞」にエッセイストの夏坂健氏の筆よって連載された。以下は、その『緑のお遍路さんたち』の抜粋・要約である。

「ゴルフの虫に噛まれたのは、いつごろですか？」

「私は晩学でした。1957年には外務省からゴルフの本場ロンドンに留学を命じられたわけですが、そのとき二つの禁忌を守れと言われました。一つは車を買わないこと、もう一つはゴルフに手を出さないこと。なにしろ当時の総理でさえ在任中は自粛するほどゴルフは贅沢なスポーツ、ましてや外交官補がゴルフなど言語道断というわけです。」

三年も滞在したが、ついにゴルフはやらすじまい。散歩の道すがらゲームを目撃しないでもでもなかったが、あんなもの、どこが面白いのかと思ってきた。

ところが帰国して結婚すると、新妻の祖父も父親もクラブのメンバー。ゴルフ狂にムコ殿が陥落するのは時間の問題。ついにゴルフクラブが買われて、練習場通いもはじまったが、うまく当たらない。

イギリスでは、初めてコースに出た日を「第二の誕生日」と呼ぶが、この日のことを古川氏は――

「いまでも冷や汗がでますね。なにしろ第一打がクラブハウスの方向に飛んで着弾不明。次に打ち直したボールが山頂に一直線。それから4ホールとい

うもの一度もフェアウエーにいかなかった。」

ところがゴルフの神様は気まぐれ。バンカーから打ったボールが直接カップインする超美技が飛び出したのだ。

「私たちのゴルフは一発のまぐれが百発のミスショットを消して余りある。その瞬間、ゴルフにはまりました。こうなったら最後、頭はゴルフのことばかり、なんだか恋をしたような気分になりました。」

かくして、地球相手の格闘技が始まる。ニューヨークに赴任するや、北米大陸の芝を飛ばし、ゴルフ熱は高まるばかり。と、そこに舞い込んだのが当時共産党支配のモスクワ行き。どうやら古川さんは、旧ソ連に初めてゴルフを持ち込んだ歴史的人物らしいのだ。

飲兵衛のイスラム行きにもまして、ゴルフ大好き人間の旧ソ連赴任は拷問だった。現在2コースほど誕生しているが、1968年当時はピンフラッグの一本すら存在せず、かろうじてロシア語に「ゴリュフ」とあるだけ。古川さんを待ち受けたのは地獄の禁断症状だった。

「会えないと思うと、さらに慕情は募る一方。ゴルフがしたくてたまらない。情報収集につとめたが、コースなどどこにもなかった。」

ある日、禁断症状に耐えかねモスクワ大学に隣接する公園にクラブを持ち込み、危険がないように、軽いアプローチを試みることにした。久しぶりに握るグリップの感触は新鮮、ヒットした瞬間の乾いた音も身震いするほどうれしかった。ボールを打っては拾い、しばし没頭していると、ふと周囲の異変を感じて見回したところ、いつの間にか大勢の人が自分を取り囲んでいるではないか。

「こりゃ参ったね。まるでプロになっ

たような気分だ」

人垣の中から怪力ヘラクレスのような大男が進み出て、いきなりクラブを貸せという。冗談じゃない。こちらは距離を調節して繊細なアプローチに励んでいるのに、むやみに振り回してモスクワ大学の窓ガラスを粉々にするわけにはいかない。断るのに必死だった。それにしても大勢のギャラリーに取り囲まれて、思いがけなく古川さんは、プロが遭遇するプレッシャーを実体験したのだった。

東欧諸国では、古くからいくつかのコースが造られてきた。ところがソ連に限ってゴルフと無縁、ゲームが行われた記録もない。思うに古川さんこそ、ソ連で最初にゴルフボールを打った人物にちがいない。(東宮大夫) (『日本経済新聞』の記事より)

イチロー、 まだ芝居続けてるの？

大場一郎 (105期)

1992年3月、105期の卒業式当日、私は公欠を貰って上京し、あの西田敏行さんが所属する「劇団青年座」のオーディション会場にいた。

受付を済ませ控室へ進む。全国から集まってきた役者の卵たちが場所を取り合い、柔軟や発声練習などのウォーミングアップに余念がない。そして全員目が怖い。

「自分以外はみんな敵だ」

そう言わんばかりの勢いだった。

私はかなり緊張していた。右を見ても左を見ても自分より凄い人間に見えてしまう。上昇し続ける心拍数、バクバク鳴り響く心臓をなだめながら着替えを済ませ、見よう見まねで体を動か

《地域社会に奉仕して30年》



府中運送株式会社

免許番号/65東陸自2黄(1)第1806号

遠藤征志郎 (72期)

■本社/〒183 東京都府中市白米台1-23-10

TEL. 0423(65)1476(大代表)

FAX. 0423(61)7600

新時代の物流をクリエイト。

■千葉営業所 千葉県印旛郡西町木下2-2-17 〒270-13

TEL. 0475(42)8661 FAX. 0475(42)8666

■府中配送センター 東京都府中市白米台1-33-2 〒183

TEL. 0423(34)4789 FAX. 0423(34)4785

■東京乳業事業所 東京都府中市豊政4-8-1 〒183

TEL. 0423(69)4612 FAX. 0423(69)6693

■三洋事業所 東京都八王子市左入町777-1 〒192

TEL. 0426(91)3172 FAX. 0426(91)3171

■電報配達事業所 東京都府中市白米台1-23-10 〒183

TEL. 0423(67)1253 FAX. 0423(60)2914

■55便事業所 東京都府中市清水丘3-28-1 〒183

TEL. 0423(33)0055 FAX. 0423(69)9672

■引越サービスセンター 東京都府中市白米台1-23-10 〒183

TEL. 0423(65)8100 FAX. 0423(61)7600



す。どうも足がおぼつかない。壁一面に張られた鏡の向こうでは、福島出身の不様な男が、レオタード姿の女性陣の中で一人もがいている。……レ、レオタード！ 3年間も男子校に隔離されていた男が始めて見る生のレオタード。別の意味で高鳴る胸の鼓動、そして18歳の健康な肉体……。私はかなり動揺もしていた。

「いかん、こんな事ではいけない」

そう思った私はロビーに出て、煙草に火をつけた。一服して気分が落ち着くと、自分を他人と比較している事に気付いた。

「最近の若者は、すぐに自分と他人とを比べてしまう。比較とは競い合いではなく、比較対象はあくまで過去の無知な自分、そして、本来在るべき理想の自分でなくてはならない」誰かがテレビでこんな事を言っていた。なるほどと思いメモを取った覚えがある。確かにその通りだ。今更背伸びしても仕様がな。自分は自分、安高演劇部に3年間在席していた単なる田舎者。それでいいじゃないか。どんな経歴の持ち主だろうが、どれだけ人生経験を積んでいようが、オーディションの前では誰もが平等なのだ。今現在の自分を評価してもらえればそれで十分だ。そう自分に言い聞かせると大分気持ち楽になり、何ら臆する事なく無事本番を終えた。

そして私は、劇団青年座の研究生として、東京での新たな一歩を踏み出したのである。稽古場の近くに四畳半一間のアパートを借り、独り暮らしを始めた。日中は稽古で汗を流す。声楽、バレエ、日舞、狂言、発声、体操、台詞、肉体表現……。一流の講師陣によるレッスンはかなりハードだ。夜はバイトで生活費を稼ぐ。飲み屋で深夜3時まで。こちらもかなりきつい。だが

弱音は吐いていられない。そこは、有り余る若さでカバーした。……はずだった。

一年と半年が過ぎた頃、私はある演出家に目の敵にされ、役を下ろされて精神的に参っていた。悪いことは重なるもので、体の異変を感じ始めたのもこの頃だった。夏場にひいた風邪がなかなか治らない。熱が37度からさがらない、呼吸をすると肺の奥で変な音がる。嫌な予感がした。やがて体重が48キロまで落ち、さすがに怖くなって病院へ行くと、「肺炎の初期症状ですね、入院とまではいきませんが、しばらく通院してください」と言われた。次の公演では役が付いていたにもかかわらず、続けていく自信がなくなっていた私は劇団を辞めた。生れて初めての挫折というものだった。

その年の冬。私は実家に戻っていた。自分の部屋のベッドに横になりながら、こらからどうしたものかと他人ごとのように考える毎日が続いた。父親のコネだかどうか分からないが、地元TV局に就職という話もあったとかなかったとか……。

だが、体力が戻ってくると同時に、悔しさがどんどんこみあげてくる。私が青年座で最も尊敬する女性演出家、宮田慶子先生の言葉が頭をよぎる。

「病気は確かに仕方がないこと。でも、それを理由に辞めるのならそれで終り、本当に芝居を続けようと思ったら稽古場でぶっ倒れるからね」

私は自分の甘さを痛感した。

「空飛ぶ魚」という物語がある。

主人公ケンタは、毎日毎日空を飛ぼうと努力していた。でも、いつまでたっても飛べやしない。ある日ケンタは、ひいばあちゃんにくってかかった。

「ひいばあウソつき。空なんかちっ

とも飛べやしないじゃないか」

「おやおや、それは残念なことをしたね。おまえ諦めちまったろ。空なんか飛べないって決めこんじまっただろ。……いいかいケンタ、人間はもともと魚みたいなもんだったんだ。その中の欲張りな魚が陸に上がり、もっと欲張りな魚が空を飛べるようになったんだ。どんなたいそうな夢も、諦めちまったらそれで終り。だから飛べなかったんだよ」

そしてケンタは、空を飛べなくなった。

もし、彼が空を飛びたいと思いつけていても、飛べるようになっていたかは分からない。でも、ひいばあちゃんの言っていることに間違いはない。

私が主宰する劇団も、今年で5年目を迎える、昨年暮れの第6回公演も無事終り、借金返済の毎日が続いている。先日、紀伊國屋劇場で宮田先生と再会する機会があった。

「おう、イチロー。まだ芝居続けているの?」

「はい」

「なら、よし」

ほんの数秒間の出来事だったが、私はこの会話を一生忘れないだろう。劇団を旗揚げし、再出発した私にとって、何より勝る激励の言葉である。

「なら、よし」……宮田先生のこの言葉と、そしてなによりも、東京桑野会105期幹事土田隆弘をはじめ、わざわざ劇場に足を運んでくれる同期の面々、先輩方、後輩達の声援が、私の生きる糧であり、掛け替えのない宝である。

(劇団 Xt. of E (エクスタビー) 代表)

公認会計士 星 武典 事務所

ムアーズ・ローランド国際会計事務所所属

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2丁目5番地 (KSビル3F)

TEL(03)3291-8361 FAX(03)-3291-8465

E-mail Address:cpahoshi@st.alpha-web.or.jp

星 武典(58期)

減費の日々と料理談義

西田幸雄 (91期)

私が安積の学舎を巣立ったのは昭和53年(1978年)3月。今年は98年だからあれから20年の歳月が流れたことになる。体の成長は、男性の場合20歳位迄と言われているらしいが私は何と当時と比べて20キロも太ってしまった(65→85)。厳密に言うと最初の9年間(27歳頃迄)はほぼ維持し、その後の11年間に飛躍的に太ってしまったようである。妻は独身時代の私のスラックスと現在のそれとを重ね合わせては溜め息をついて「こんなに変わり果てるなんて。私は騙された。」とぼやく。高校時代の制服が今でも着れる体型を維持している彼女にしてみれば私がこんなに太ったのが許せないらしい。「三人も子供を産んだ私が努力して維持しているのにアンタは自覚が足りない!」と容赦ない。

溯ってみると肥満化した11年のうち最初の4年間で14キロ、その後の5年半で11キロ増加し、最近1年半で5キロ痩せたことになる。11年前仕事で夜遅く出張の多い営業職に配属され1年半前に内勤に戻ったことと無関係ではなさそうである。

最近の減少傾向をみて一計を案じた妻は、昨年末に脂肪計付きのヘルスメーターを購入してきた。減費が本物かどうかを試すという。そのヘルスメーターで今年の正月は我が家で大いに楽しませてもらった。年の初めなのでものは試しにどうぞとごく丁寧に、時には強引に腕ずくで、訪ねてきたお客をその体重計に載せてしまうのだ。

“傑作”だったのは独り暮らしをして

いる20代の知人だった。「ボクは50キロそこそこ」と言っていたのに計ってみると58キロ、脂肪率40%。慌ててパンツ1枚になって計り直しても同じだった。そこから話は食生活に及ぶのだが、彼はご飯とイカの塩辛が大好きで毎食4杯から5杯もお代わりをすると白状した。おかずは生ゴミを出すのが面倒なのでまず作らないそうである。我が身に手を合わせて「それじゃ太るのが当然」と得心した。

似たような独身男性に聞いてみると料理をこまめに作っている人は皆無に近かった。インスタント食品は便利になる一方だし、コンビニで手軽に弁当が入手できる時代のせいかもしれない。ついでに初めて作った料理、得意な料理を尋ねると、共にカレーライスと答える人が圧倒的に多かった。サラリーマンならいつ我が身にふりかかるかもしれぬ単身赴任の友人も「カレーライスは一番重宝な料理」と口を揃える。調理が簡単で作り置きが出来るのが何よりの魅力らしい。

単身赴任族と言えば以前に「最も手軽で栄養たっぷりの愛用鍋」の話を讀んだことがある。まず月曜日に大鍋で野菜と油揚げの味噌汁を作り、火曜日は豆腐にワカメを加え、水曜日は豚肉、木曜日は餅を入れ最後の金曜日はご飯を入れて食べ尽くす。味噌汁のバリエーションから豚汁、雑煮、雑炊に変わっていくアイデアだ。

世の中多様化してきて大の男がそれも歳をとってからいつ独り暮らしになり、料理をしなければなくなるかわからない。地方転勤に伴う単身赴任がそうだし、定年退職後に長い間連れ添った細君から三行半を付きつけられるケースもある。

男子厨房に入らずではたちまち成人病の餌食になってしまうことはくだん

の知人の話で実証済み。諸兄殿、辛くても後片付けが厄介でもその時に備えてたまには包丁でも握ってみませんか? (読売新聞社)

メコン川流域を旅して

村上昌弘 (85期)

この2年間、文部省学術調査のメンバーに加えてもらうことができ、メコン川・ガンジス川へ計3回訪れる機会を得た。本調査は淡水に生息するサメ・エイの資源調査および淡水への適応機構の解明を主たる目的としているが、調査の内容については、まだ正式な調査報告がでていないので、別な機会に譲ることとして、今回はメコン川流域の紹介をする。メコン川はヒマラヤ山脈に源を発し、ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジアを縦断し、南シナ海に注ぐ大河であることはいままでもない。

初回は、1996年11月にバンコックの中心を流れるチャオフラヤ川の上流域とラオス国境のメコン川で調査を行った。前哨戦ということで他の2回に較べれば大名旅行であった。特にラオス国境近くのウボン・ラチャターニという町の印象が強く残っている。市場(“ムーンリバー”というどこかで聞いたことがある川のほとりにある)の近くにあるタイシルクの店では国宝級のおばあさんが織物を織っていた。店構えは貧弱であるが、素人目にもすばらしいとわかる織物である。大枚をはたいて奥様のためにもとめてきたが、あの織物はどうしたのだろうか?この町から車で約1時間の所にチョン・メックというラオスとの国境の村がある。検問

健康づくりのパイオニア



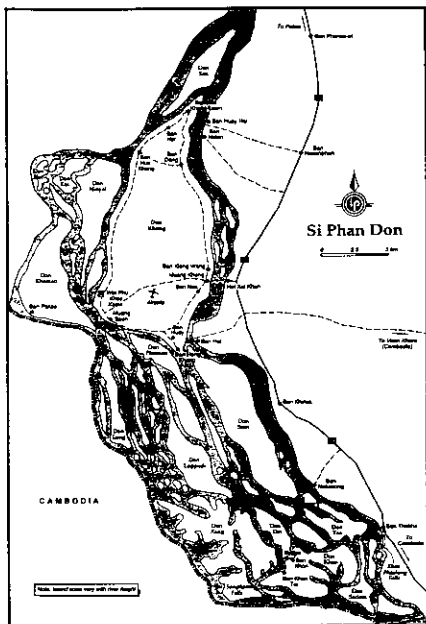
丸光産業株式会社

より良い医療・介護用品づくりとトータルの介護サービス提供をめざします。

【本社】 東京都台東区東上野3丁目15番6号 ☎ 03-5818-0303

【工場】 福島県郡山市富田町久根下40番地18 ☎ 0249-52-4511

代表取締役 高田勝利(76期)



コーン・アイランド付近の地図

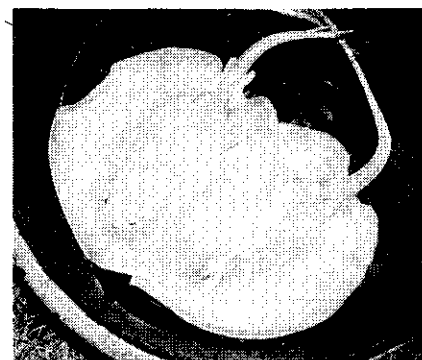
はあってないようなもので、簡単に誰でもラオス領に入ることができる。メコン川を船で渡ってラオス領に入ることも可能である。恐らく違法行為なのであろうが、ラオスのカウンターパートの方が“大丈夫”というので侵入してみた。村の市場では密造酒(?)がペプシのビンに入って売っていた。ふたはセロハンで輪ゴムで止めてある。中にはムカデや訳の分からない虫が入った物もあったが、ここでは無難な酒を購入した。しかし、さすがの私でも試してみる気には至らず廃棄処分となった。このチョン・メックの山向こう(車で約1時間)に翌年の正月に訪れることになるパクセというラオス第2の都市があることは全く知らなかった。

ラオス領のカンボジア国境のメコン川で淡水エイが沢山漁獲されるという情報が、ラオスのカウンターパートよりもたらされ、2度目のメコン川調査旅行が企画された。カンボジア国境で

あるということから、緊張してガイドブック等でラオスの情勢を調べた所、ラオスは観光に力を入れており、一部地域を除いて安全な国であるということが分かってきた。昨年、廃棄した酒もラオ・ラーオという有名な密造酒(厳密にいうと)であり、餅米から作られる美味な蒸留酒であることが判明した。ピエンチャンから上記パクセまでLao Aviationのほろプロペラ機で飛び、そこでレンタカー(運転手付三菱のGoodワゴン車!)をチャーターし、砂漠化した悪路を約4時間でコーン・アイランドというメコン川中州の島に着く。この付近は川幅約10kmで、大小3000の島が点在する。下流にはフランス軍の侵攻を阻止した巨大な瀑布がある。私たちが訪れたのは、乾期でメコン川を除き全てが乾ききっている状況であったが、この瀑布は非常に豊富な水量をもっていた。コーン・アイランドは、観光地で多くのフランス人が保養(?)のために訪れている。ラオスはフランス領であったので、フランス語は比較的通じる。英語はダメ。日本人もちらほら見かけた。蝶の調査のグループもいたが、全てが乾ききっていてダメだということで、早々退散してしまった。私たちは、この島からさらに南下したカンボジア国境近くのバン・キナックという村を起点として調査を行った。ちなみに、ここのホテルは2ドル/日!メコン川の水をドラム缶にくみ上げ、シャワーとして使っている。食堂でも、調理にはメコン川の水をそのまま使う。身も腹もメコン川の水で清められました。飲料水は、紫外線で殺菌した水があるので、安全です。生野菜を食べない、生水を飲まなければ大丈夫です。ちなみに、私は、一度も腹痛、下痢におそわれることはなかった。毎日、ここを起点にカンボ

ジアとの国境緩衝地帯を通過し、小船でドン・サダムという島へ行き来し、調査を行った。数年前には、カンボジア領から銃撃があったということだが、今は安全なようです。ただ、陸づたいにカンボジア領に入ると、危険だとのこと。運が悪いと、身ぐるみはがれるそうです。カンボジアを対岸に眺めながら、悠然と野グソをしてきました。この付近に10日間滞在した。大晦日は、コーン・アイランドのレストランでラオ・ラーオを飲みながら過ごした。やはり、ペプシのビンに入ってきたが、泡盛に似ていて非常においしいし、安い。ラオスのビール、ピヤ・ラーオも結構いけます。タイのビールよりうまいと思う。ラオス料理も非常においしい。彼らは、野菜をよくたべます。このあたりは、マラリアの危険地帯に指定されているが、アンチ・マラリアの薬草も、食卓にあがっていた。この付近のマラリアは耐性を持った熱帯性のマラリアなので、お出かけになる方は十分注意してください。この他、メコン川住血吸虫、デング熱、肝炎などあらゆる寄生虫病、伝染病が存在するようだが、神経質にならず、環境に同化するのが一番の薬だと自己暗示をかけていた。

パクセの近くには、ワット・フーと
(p.20へつづく)



生きた淡水エイ



五十嵐冷蔵株式会社

〒108 東京都港区芝浦二丁目10番5号 ☎(03) 3451-1111 (代)

吉田 弘俊 (52期)



ラオス国境付近の水上レストランでナマズを釣る。釣果は胃の中に収まった。

いうクメール王朝の寺院があるが、時間の関係で訪れることは出来なかった。これが唯一の心残りである。

ビエンチャン市内は、みるべき観光スポットはほとんどない。半日もあれば(それも徒歩で)すむ。ビエンチャンを起点としてラオス北部を観光すると面白いようである。最近ラオスは、観光に力を入れていて(他に産業はない)、道路の整備を含め各種施設の充実を図っているところである。“2000年にラオスを訪れなさい”というポスターがいたる所に張ってあったが、政府関係者に聞くとスケジュールは遅れており、2001年にずれ込むとのことだった。

不潔だ、キタナイという観念を捨てて自然に溶け込めば、非常に興味深い国々です。人情も非常にあついで。まだまだ、色々な話があるのですが、紙面にも限りがあるので、この辺にさせていただきます。機会があれば、是非、都会ではなく、田舎を訪れてみてください。

最後に、文部省学術調査ということで、血税を使わせていただき、個人では訪れようもないところを訪れることができました。この場を借りて関係各位にお礼申し上げます。

(東京大学農学部水産研究室)

事務局便り

●会報の発送は、会員各位の住所動向に大きく左右されてしまいます。住所が変わっていると、せっかくの会報も戻って来てしまうので、住所変更の際は東京桑野会の事務局まで、ご連絡下さるようお願い致します。安積桑野会の方にご連絡された方も、ご面倒でも東京桑野会の方にもご連絡下さい。

●総会の出欠葉書を同封していますが、事務処理の都合上葉書には必ず住所、氏名、期を記入して下さい。時々ご自分の期と卒業年を間違えておられる方がいらっしゃいますが、会報をお送りした封筒の宛名ラベルの右下に記入してあるのがご自分の期ですので、お間違えないようお願い致します。勤務先は変更がなければ省略していただいても結構です。

そして、連絡もれもあるかと思われまますので、お誘い合わせのうえ、多数のご出席をお願いします。

編集後記

●弥重先生の訃報を聞き、何年前か前、この会報の原稿を弥重先生に依頼し、久しぶりに叱られ、郡山まで会いに行ったことを思い出しています。今回は先生を偲ぶ特集号になりましたが、多くの世代にわたって安積のシンボリック存在であったし、本当に安積を愛した先生だったと感じ入っています。

(79期 櫻井淳)

●毎年のようにやってくる会報の編集、昭和57年に会報1号を手にして以来読者から編者へと立場が変わっての会報づくりは、楽しくもあり苦しくもありと

いったところですが、多くの諸先輩、会員各位のご尽力あったればこそと心得、気持ちを新たに取り組んでいます。節目の20号、これからの10年を見据えて発展させていくためにも、若い100期クラスの参加をぜひお願い致します。

(81期 渡邊龍一郎)

●彌重先生ご世界の報あり。沈黙。回想。追悼。涙。私は先生が安積への「愛」と「正義」を彫りぬいたあの力強い版画で表紙を飾りたいと思いました。この意をこめてお嬢さんの柳沼悦子さんに作品のお伺いをしたところ先生が自選された版画集「あさかのうたⅢ」の紹介を受けました。更に「父の背中」といった原稿の依頼もしたのですが都合によりその件は「あさかのうたⅠ」と「Ⅱ」の先生ご執筆の文集から遺稿として一編、掲載させて頂く推移となりました。思えばトックリ、ホラテン、カッポン、カーペンター、ついにはヤジウ悉く天上人となりぬ。これより先は春一番に吹く風も轟き渡る雷鳴もこれ恩師彌重先生の天声にしてこれある時は心して拝聴あるべし。

(74期 高松豊)

『東京桑野会会報』No.20

1998年4月1日発行

発行・編集人 ■ 澤田 悌

発行所 ■ 東京桑野会事務局

〒160-0000 東京都新宿区新宿1-3-8

YKB新宿御苑804

斉藤法律事務所気付

Tel 03-3356-6677 Fax 03-3356-6678

広報部 ■ 株式会社リユウ・コーポレーション

〒107-0000 東京都港区南青山5-12-28-802

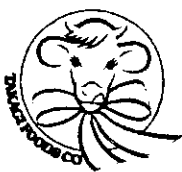
渡邊龍一郎 (81期)

Tel 03-3797-6602 Fax 03-3797-6603

製作 ■ 株式会社パンオフィス

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-7

Tel 03-5280-9690 Fax 03-5280-9691



21世紀の子供達のために

新鮮で安全な食品の提供を

精肉、そうざい、ハム・ソーセージの製造販売

タカギフーズ

株式会社

〒251-0024 神奈川県藤沢市鶴沼橋1-2-4

クゲヌマファースト4F

TEL0466-26-2506 FAX0466-22-3977

常務取締役 近内 靖夫 (69期)

店舗網: 関東地区16店(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県
茨城県・栃木県 他 静岡県・長野県 3店)